

酒田大火

昭和五十一年度 六年 男児

十月二十九日の午後六時ごろ、母が電話で

「銀行の近くのグリーンハウスが、火事だ。」と知らせてきた。ぼくは、

「銀行が焼けてしまったら、どうしよう。母の働く所がなくなってしまう。」と、とても心配になってきた。しかし、すごい風にあおられて、火は東へ、東へと向かって来る。ぼくの家の上まで赤くなってきた。母のことが心配になってきた。

心配しているうちに、七時十五分ごろ、母がびしょぬれで帰ってきた。ぼくは、すぐにバスタオルをやった。

「銀行が燃えるかも知れないので、急いで、金庫に書類や、お金を入れてきた。」と言った。

ニュースを聞きながら、ごはんを食べた。ごはんがすんだころ、

「大沼や、ト一屋に火が移った。」とニュースで伝えた。

「いったい、酒田市の商店街はどうなるんだろう。」と心配になってきた。それから、次々と東に向って進み続けた。心配になって、ちよつと外へ出てみたら、大きいビ―玉位の赤い火の粉が飛んでいた。ぼくは、

「もしかして、新橋も燃えるのではないかな。」と思った。「風さえなければ、そんなに燃えないんだけどなあ。」と言いながら、庭へ出て、バケツに水をくんで、火の粉が落ちてきたら消そうと、待ちかまえていた。しかし、火の粉は、ぼくの家や、加川君の家を通り越して、ずうつと向こうへ飛んで行ってしまふ。母が、

「だいじょうぶだから、家にはいりなさい。」と言ったので、家にはいって、テレビを見た。でも、心配で、心配でたまらないので、時々、ベランダのカーテンを開いて外を見た。「いったい、どの辺まで焼けたんだろう。」と考えていると、テレビで、全焼した主な建物を伝えていた。その中に、小村書店の名前もはいていたので、

「あんな所まで、焼けたのかなあ。」とびっくりした。火はいっこうにおさまらず、こっちへ向かって、進んでくる。

消防署も

「火の回りが速いし、風も強いので、水がまっすぐ飛ばない。」と、話していた。

「ちくしょう。いつになったら、火が消えるんだ。」と、くやしくなってきた。とうとう、八軒町まで火が移った。母とぼくは、心配で、何回も何回も外へ出て火事の様子を見た。ピンポン玉位の火の粉が、こっちの方まで飛んでくる。

「ここまで火の粉が飛んでくる。東栄町や学校の所は、もっとすごいだろうなあ。」と、母と話し合った。

三時ごろのテレビでは、

「新井田川で火をくい止める計画を立てて、川の所に、消防車が七十台も並んでいる。」と、伝えていた。ぼくは心配のあまり寝る気もしない。こたつに入って、テレビを見ているうちに、自然と眠っていた。

目をさましたら、宮海のおじいさんがきていた。心配でかけつけてくれたのだろう。新井田川では、消火作業が行われていた。だんだん、火は消えていた。

「もうだいじょうぶだ。」と、おじいさんが言ったので、ふとんに入って寝た。それは、四時すぎだった。ふとんに入ってから、

「もう二度と、こんな火事はおめんだ。」と思った。ぼくは、初めて、火事の恐しさを知った。